

# 対馬市立巖原北小学校のESDへの取り組み

末廣 悠芽

## 1. はじめに

今回、2019年9月16日～2019年9月19日に実施した対馬アクションリサーチ合宿に同行し、4日目に訪問した対馬市立巖原北小学校で行われているESD活動についてヒアリング調査を行った。巖原北小学校は長崎県対馬市巖原町の小浦・曲・南室地区を校区とする小学校で、3年前から国境離島の「持続的な社会を担える人材を育てる」ための教育(ESD)への取り組みを行なっている。この報告では、巖原北小学校で行われているESDの活動内容、教育的価値、地域コミュニティでの役割の3つをまとめていく。

## 2. ESDの活動内容

巖原北小学校では3年生～6年生の「総合的な学習の時間」の授業時間を使って、ESDの一環としてふるさと学習を実施している。2019年度は、6年生は「対馬の持続可能な島づくりに貢献している人々」を、5年生は「ツシマヤマネコをPRしよう」、4年生は、国選定無形民俗文化財「曲の盆踊り」の発祥の秘密探求、3年生は「椎茸の原木栽培とレシピ開発」を学習対象としている。

その中で我々は、第4学年(担任:石見教諭)の総合の時間に授業見学をした。4年生では、「曲の盆踊り」を題材として、歴史・文化・伝統の領域を扱う。江戸時代に対馬の20以上の集落で行われていた盆踊りが現在は5か所に減少し、そのうちの1つが巖原北小学校の校区内の曲地区で伝承されている「曲の盆踊り」である。これは国の無形文化財にも指定されており、現在まで盆踊り保存会の方を中心に大切に受け継がれてきた。しかし、高齢化や人口減少などの要因で、伝統を受け継ぐことが困難になってきているという。この総合の時間は、「曲の盆踊り」を題材に「地域の抱える問題を知り」、「自分たちにできることとは何なのかを考える」ことで、持続可能な社会についての学びの基礎を培う内容になっている。

私たちが見学した2019年9月19日に行われた授業では、曲の盆踊りのルーツといわれる福岡県宗像市の鐘崎地区の盆踊り保存会の方やその土地の小学生から聞き取り調査によって得た鐘崎地区と曲地区の盆踊りの比較データを使用していた。そのデータを思考ツール(ベン図、Yチャート)によって、共通点と異なる点にラベリングした。最後は、「伝える場所がちがうと、踊り方や衣装などちがうことが多い。しかし、伝統を守りたいという思いは同じ」という、まとめをしていた。全体として、これまでの授業で設けていた仮説から課題が明確になり、次のまとめの工程に結び付くという内容だった。これは、「個々の児童に関心のある視点を持たせるとともにその視点が多面的であること」というESDの視点の獲得につながるという。授業内では、盆踊りの由来や歴史、衣装や小道具、

踊り方や踊る場所、といった3グループに分かれ、個々の児童の関心のある視点のグループに分かれて調べ学習を行い、その成果を発表していた。

### 3. ESDの教育的価値

厳原北小学校で行われているESDは現在の平山校長が取り組みを始めて3年目になる。国境離島の「持続的な社会を担える人材を育てる」ことを目的としている。これまでのESD活動の取り組みの成果は、児童アンケートの分析結果からは、児童には郷土観の変容や将来必要となる能力や態度の獲得が見られた。また、教師アンケートの分析結果からは、ESDの必要性への理解が得られた。

郷土についての教育は、今まで地域や伝統文化について親や地域の人が子に継承してきたが、地域コミュニティの希薄化、親世代の郷土に関する知識不足などの要因からその役割を学校教育が担っていかなくてはならなくなっている。また、少子高齢化や人口減少といった問題を抱える対馬の子供たちは、高校あるいは中学卒業後に本土へ進学していく。ESDの活動を通して、教師は、児童の今後の課題や自分自身の生き方に対する関心を高め、対馬の未来のために何ができるのか構想し、持続可能な対馬の未来の姿に夢や希望を持たせることを支援している。

私は、厳原北小学校で行われるESDの目的は、郷土を知ることによって実現されると感じた。進学のために島から離れる子供たちにとって自分の生まれた土地はどういった場所なのかを知っているのと知っていないのでは、将来を決める際の価値観に影響が出てくると考えることができる。この価値観は、島にすべての子が残ることや帰ってくるのではなく、郷土の価値を理解していることや故郷を誇れることを意味する。私たちの生活は歴史や文化、自然と深いかかわりがあるが、便利な技術や文明によって見えづらくなっている中で、ESDに取り組み、地域を担う人材を育成することの価値は大きいだろう。

### 4. ESDの地域コミュニティでの役割

ふるさと学習を行うためには、その土地の自然や伝統、文化を教えてくれる人や体験できる環境が必要になる。厳原北小学校の場合には、地域の名産品の生産者、伝統文化を継承している人、自然保護を行っている人、など様々な分野の地域人材とのつながりを大切にした学習を展開している。これらのことから、ESDにおいて、人と場所の確保のためにも、教育機関と地域コミュニティとの連携が必要であるといえる。

また、地域コミュニティにとっても、これまで受け継がれてきた伝統を絶やさないために、若い世代へ継承していく人や場を確保する必要がある。ESDを行うことで、小学校の総合学習という場で、これからの未来を背負う小学生に伝える機会が設けられる。さらに、地域にとって、ESDは、地域の魅力を子供たちに発信できるだけでなく、ともに未来の

地域のことを考えていくことができる。厳原北小学校でも6年生は「魅力ある未来の対馬の姿を提案しよう」というテーマで、情報収集・分析・まとめ・発表を通して、地域の未来について学び考える授業を行っているように、ESDにとって地域の役割は重要であり、協力なくしては成立しない。

## 5. 考察

今回、厳原北小学校で行われているESD活動を活動内容、教育的価値、地域コミュニティでの役割などを聞き取り調査して、活動を通し、地域の未来を担う子供たちへの教育をすることは、持続可能な社会の実現のために重要な役割があるということが分かった。

文部科学省の日本ユネスコ国内委員会（2013）によると、ESDの実践には、1. 人格の発達や、自律心、判断力、責任感などの人間性を育むこと、2. 他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を認識し、関わり、つながりを尊重できる個人を育むことの2つの観点が必要であるとされている。厳原北小学校では、上記1に関して、少人数教育であることを生かし、個々の児童の興味・関心を探究できる授業となっていた。加えて、その探究の成果を発表することにより、伝える能力を育んでいる。上記2に関して、活動の中で地域やNPO、自治体の様々な人材から話を聞き、経験を得ることにより、多角的な観点に触れることができ、小学生という個人の人格形成段階において重要な役割を果たしている。

また、厳原北小学校でESD活動として行われている地域でのふるさと学習を通じた学びの中で、環境・経済・社会を考える際の多様な価値観や地域課題の解決のための分析力・思考力を育むことができる。これは対馬に限らず、他の地域でも獲得できる。しかし、地域の協力なくしては成り立たないため、周囲の環境によって地域格差が生じてしまうかもしれない。都市は地方と比べると地域との関わりが希薄なため、ESDを実践できる人材や場の確保が今後の課題となり、これは社会にESDを広めていく上での課題ともいえる。

## 6. 感想

対馬アクションリサーチに参加してみて、地域固有の文化や伝統、自然を知ったり体感したりする中で、人と人のつながりを感じるが多かった。この報告で取り扱っている厳原北小学校のESD活動も、持続可能な対馬の人材育成をするうえで、地域の人やその他いろいろな人の協力が必要であった。この調査に関しても、平山校長が貴重な時間を割いてお話しくださったり、4年生の授業見学の時間を与えてくださったり、我々だけでは学ぶことができなかった。調査として参加した我々も、ESDに触れることができた貴重な機会であったと思う。今回、人と人のつながりに触れ、そのつながりも私は対馬の魅力であると感じた。対馬の魅力をこれからも残して行ってほしいと思う。

## 【参考文献】

「対馬の伝統を引き継ごう」対馬市立巖原北小学校第 3～6 学年総合的学習授業計画書,  
アクションリサーチ合宿 4 日目配布資料, 2019

対馬市立巖原北小学校ホームページ,

<https://sites.google.com/view/izuharakita> (2019 年 10 月 21 日アクセス)

文部科学省日本ユネスコ国内委員会, 2013,

「持続可能な開発のための教育 (ESD: Education for Sustainable Development)」,

<http://www.mext.go.jp/unesco/004/1339970.htm> (2019 年 10 月 21 日アクセス)

(すえひろ・ゆか 立教大学社会学部現代文化学科 3 年 阿部治ゼミ)